空ふる～カラフル～

未華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空ふる～カラフル～

【Ｎコード】
Ｎ９４０８Ｐ

【作者名】
未華

【あらすじ】
気が付くとそこは異世界だった。
ありふれたファンタジー小説のような書き出しの言葉。
それがまさか、自分が口にする羽目になるだなんて！
訳もわからないまま、気がつくとそこは異世界。
しかもなぜか売り物にされて。

そして私を買ったのは、超感じの悪い男。
これからどうなっちゃうんだろうか……て！　落ち込んでいるのも勿体無い！！
せっかくやってきた異世界、しっかり堪能してやるわよ！

運悪くうっかり異世界に落ちた元気少女と、素直になれない捻くれ男のお話。
まったり異世界ライフ……のつもりが、やがて大きな事件に巻き込まれていき、話は急展開へ。
少女の愛と冒険の物語！？

0章

ふざけるなって思う。

本当に最悪だ。

散々人のことを振り回しておいて、サッサと自己完結でさようならってなに！？

悔しくて悲しくて、そしてすごく切なくて……。

あんなに泣いたのに、また涙が溢れてきて、慌ててそれを乱暴に拭い取る。

こんなこと認めない。

いつだって“あいつ”は、自分勝手で人の気持ちなんておかまいなしなんだ。

馬鹿みたいに独りで抱え込んで、相談の一つもしてくれない。

“あいつ”にとって、私は何なんだろう？

こんな別れをして、サッサと元の世界に返るとでも？

お生憎様。私を見くびらないでよね！

誰になんて言われようと、私は“あいつ”をあきらめたりなんか

しないんだから。

それがたとえ、どんなに無謀なことだったとしても……。

1章　そこは異世界！？（1）

気が付けば、そこは異世界だった。
そんな書き出しの小説を読んだことはあるけれど、まさか自分がそんな状態になるなんて夢にも思わなかったわ。
信じられないことだけど私、高市優美（たかいちゆうみ）は、異世界に迷い込んでしまったらしい。

なぜ、ここが異世界だって分かるかって？
そんなこと、この場にいれば誰だって気づくと思う。
だって今まさに、私の目の前で戦いが繰り広げられてたりするんだから。
映画の撮影じゃなければ、ドッキリでもない。
本物の剣と魔法。
右の若い男が剣で切りかかれば、左にいるおじいちゃんがブツブツ言いながら、杖から炎を出して応戦する。
何て言うか、この臨場感はその場にいなきゃわかんないと思うけど、ともかくものすごい迫力がある。
命をかけて、これがイカサマじゃないって断言できる。
私的には、これが夢であってくれた方が嬉しいんだけどね。

大体、悠長に実況中継してる場合じゃないのよ。実は。
なにせ、私は鉄格子の檻の中、手は太い鎖で繋がれて、足についた鎖の先にはご丁寧にもめっちゃ重い鉄球付き。
私ってそんなに危険にみえるの？
私はただの非力な女子高生なんだけど。
間抜けなことにパジャマ姿だしさ。
それなのになに？
この“猛獣注意”みたいな扱いは。

そもそもあまりにもおかしいわよ。
だって、ついさっきまで、自分の部屋で気持ちよく寝ていたはずなのよ。
夜中に喉が乾いて目を覚まして、部屋のドアを開けてたら……“落ちた”のよね。
ドアを開けたら、その下は何もない空洞だった。
でさ、もちろんそこから一歩出れば落ちるわけ。
真っ逆さま？
出るなよって話だけど、空洞だって気づいたのと、足が出たのは一緒だったんだもの。
だって普通、部屋から出て穴があるとか予測不可能でしょ？
若干鈍いことは認めるけれど、これはどう考えてもあるはずのないところに穴がある方が悪いと思う。
落ちて、気が付いたら目の前に青い空が広がっていた。
そう。それはまるで、空から真っ逆さまに落ちてしまったかのよう。
生い茂る草の上に身を横たえたまま暫くの間、現実を受け入れることが出来ず、私はひたすらに空を見つめていた。
そして、起き上がったと同時に後ろから口に布を当てられて、意識を失って、気が付いたら檻の中だったというわけ。
何度思い返してもありえなさすぎる！
すでに色々とありえなさ過ぎて、現実逃避気味。
と、そんなことを思っていたら、一際大きな歓声が聞こえてきた。

（なにごと！？）

見れば、若い男がおじいちゃんに剣先を突きつけている。
うーん。勝負あったってとこかしら？

私はあらためて、勝者の男をまじまじと見てみる。
歳は多分、私より三つ四つ上くらいだと思う。
周りの観衆は髪や目の色が色々いるんだけど、この人は黒髪に黒い瞳。
雰囲気も日本人ぽい。
黒髪は無造作ヘアで首に少しかかる程度の長さ。
普通に街中にいそうな、ちょっとオシャレなお兄さんって感じ。
背はそこそこ高いし、何気にイケメンだわ。
雰囲気はなんていうか、やんちゃないたずらっ子ていう感じ。
格好は、見事に上下共に真っ黒な上に、羽織っているマントまで黒い。
何かのコスプレにしかみえない。
もっとも、周りもみんなコスプレ状態だし、こういう服装がここでの普通みたいだ。

よくよく観察していた私は、その男とバッチリと目が合ってしまった。
すると、私に向かって真っ直ぐと歩いてきた。

（こっち来た！？）

檻の中で座り込んでいる私の前で、男も目線を合わせるようにしゃがみ込んだ。
私を値踏みするかのように、繁々と無遠慮に見てくる。
あからさまにジロジロ見られるって気分悪い。
しかもこんなパジャマ姿を。

「な、なによ？」

私はイラッとして、男をおもいっきり睨むかのように見返す。

もっとも男は全然動じてなくて、むしろおもしろいものを見るかのように口元を緩める。

「▲☆×◎◆※×○▲※☆◆」

男は、私へと何か言葉を発する。

ただし、なにを言われているのかはさっぱり分からない。

一体、これは何語なの！？

色々な国の言語を目まぐるしく頭に思い浮かべるけど、まったく検討もつかない。

いやいや、そもそも何語か分かったところで、私は日本語しか話せないから！

どうりでさっきから、周りの声がよく聞き取れないと思ったら、私の知らない言語だからなのね。

ぼんやりそんなことを思っている私に、男はさっきから何かを言っている。

なんだろ？　うーん。身振り手振りを加えつつ、段々と大声になってくんだけど。

「あの……」

言っている意味分からないんだってば……て言いたいのに、男は矢継ぎ早にまくし立てて言葉を発する余地がない。

なんかすごいイライラする。

何でいきなりこんな意味わかんないことになるわけ？

夜中に部屋から出たらいきなり落ちて、訳のわからない奴に檻に押し込められて、挙句、訳のわかんない奴に訳のわかんないこと言われて……。

「もう……嫌……」

なおもしゃべり続ける男を睨みつける。

「うるさいってば！！　言ってる意味わかんないし、そもそもあんた誰よ！？　名を名乗れっつーの！！」

私はイライラを込めて思いっきりそう怒鳴った。

（2）

「……」

男はピタリとしゃべるのを辞め、ポカンッとした間の抜けた顔で私を見ている。

「はぁー。やっと静かになった」

けど、突然大声出したから、酸欠状態で息が荒くなる。

そんな私を険しい顔で男は暫く見てから、閃いたというように、大げさにポンッと手を打つ。

そうしてから、遠くで見守る群衆に何事かを話しかけている。

と、その中から大きなカバンを持ったおじさんが前に出てくる。

二人は二言三言交わして、おじさんはカバンから何かを取り出して、男に渡したみたいだった。

（何だか人が増えてない？）

私が思わず怒鳴ったせいかしら？

言葉は分からなくとも、何となく好奇な目を向けられてるっていうのは分かる。

今だって、私に近づこうとした子供が、必死な形相の大人に引き戻された。

（別に噛み付いたりするわけじゃないのに。何だか傷つくんだけど）

動物園の猛獣にでもなった気分だわ。

「きゃっ。なに！？」

いつの間にか戻ってきていた男に、いきなり檻の外から腕を掴まれ、すごい力でひっぱられた。

座り込んでいた私は、むりやり立たされて、腕は男に掴まれ檻の外にある。

（この状況って、ものすごく危険じゃない？）

サァーっと血の気が引いていく感じ。

男は手に得体のしれない何かを持っていて、掴んだままの私の腕に近づけていく。

変なクスリとか？　もしかしたら、うるさいからって刃物とかで殺されちゃう！？

「こんなところで、訳わかんないまま死ぬなんて嫌！！」

半泣き状態で男の手を振りほどこうと暴れてみるけど、私の抵抗もむなしく、何か手首に冷たい感触を感じた。

「離せ！　変態！！」

更にパニック状態になった私は、火事場の馬鹿力というやつで、見事男の手を振りほどいた。

おまけに、振り回した腕が、男の顎に命中して、男は後ろへと倒れこんだ。

「最悪、最悪！　なんなのよ！！」

やっと自由になった腕を胸元に持っていくと、手首には見慣れない銀色に光るワッカがはめ込まれていた。

（腕輪？）

どうやら、冷たい感触の正体はこれだったみたいだ。

「てっめー！　誰が変態だ！！　つか、痛いだろーがっ」

起き上がった男が、怒りを滲ませた目で私を睨んでいる。

「だって、いきなり腕を掴むから……って、あれ？」

唐突に言葉が分かるようになっている。

おかしな話、相手が日本語を話しているわけじゃないっていうのは分かる。

けど、なぜかその意味の分からないはずの言葉が唐突に理解出来るようになっているのだ。

「……元気がいい子だねー」

「まったく……は、これで何度目だ？」

「ねーねー？　あれって悪い人？」

「見えね……ぞ……」

周りにいる人の言葉も、何を言っているのかやっぱり理解出来る。

「言葉が分かるみたい。これってどういうこと？」

「その腕輪をしてっからだよ」

私の疑問に、男は不機嫌そうな顔ながらも答えてくれた。

「これ？」

付けられたばかりの腕輪に目をやる。

うーん。見た感じ、ただの銀色のワッカなんだけど。

「それは、あんたとこの世界の住人の波長を合わせられるようにしたもんなんだよ」

「波長？」

「だからつまり……あー、あれだ。ほら……そう！　翻訳機ってことだ」

眉間に指を置き、むむっと暫く考える仕草をしてから、男はそう答えをひねり出す。

つまりこれをしていれば、ここの人たちに私の言葉が分かって、相手の言葉も分かると。

ただのワッカなのに、という疑問はこの際考えないことにしておく。

「言葉が分からないって、不安でしかたなかったんだよね。ありがとう」

意思疎通が出来るってすばらしい。

とりあえずは、これでここがどこでどうやったら帰れるか聞けるわ。

「まぁ、これから一緒に暮らすのに、言葉が分からなきゃ不便だもんな」

男はサラッとそんなことを言う。

「はぁ！？　一緒に暮らすってどういうこと？　いきなりどうしてそんな話になってるのよ！」

「あぁ。あんたは訳わかんないよな。うん。つまり単刀直入に言えば、あんたは俺が買い取ったんだ」

男は平然とした顔でそう言ったのだった。

（3）

「か、か、か、買い取ったってどういうことよ！？」

私は、唖然として暫く呆然としてから、何とかそう言葉を吐き出す。

「あはは。やっぱ、そういう反応か」

朗らかに笑う男を思わず睨む。

当たり前だ。

買い取ったって言われて、はい、そうですか。って、納得する馬鹿がどこにいるのよ！

「んな睨むな。落ち着け。まだ自己紹介してなかったな。俺は、サガラっつーんだ。お前は？」

「私は、高市優美……です」

「タカイチユーミ？　長いし言いづらいな」

男……サガラは、私の苗字と名前をくっつけて変な発音で繰り返す。

「高市は苗字。優美が名前。そんな風に続けて言ったら言いづらいにきまってるじゃん」

どうやらサガラは、苗字と名前という区分が分からないらしい。

この世界に苗字はないのかもしれない。と、そんなことを思う。

「なんだよ。最初からそう言えよ。じゃあ、ユーミって呼べばいいな」
「うん。それでいいよ」
ユーミじゃなくてユウミなんだけど、今はそんな細かいことはどうでもいい。
重要なのは、今私が置かれている状況だ。
「それで、どういうことか説明してよ、サガラ」
「へいへい。その前に、場所を変えた方がいいだろ」
そう言われて、辺りを見回すと、遠巻きながら興味深げに私たちを見ている野次馬らしき人がたくさんいる。
それに気が付いたら、パジャマ姿で鎖をつけているなんて自分の姿を思い出して、急に恥ずかしくなってきて、顔が熱くなって来る。
サガラは檻の鍵を開けると、「来い来い」というように手招きをする。
「……」
ともかく、ココで見世物になるよりはマシだ。
という考えに至って、私は檻の中から這い出す。
「その鎖も外すか」
出てきた私についた、手と足の鎖もサガラはすんなりと外してくれた。

「じゃあ、行くか。こっちだ」

サッサと歩き出すサガラの後ろを、私は不本意ながら付いていくことに決めた。

こいつを信用したわけじゃやないけど、今の私にはそれしか選択肢がなかったからだ。

人通りの多い繁華街らしきところを抜けて、木々が覆い茂った森の小道を進んでいく。

くねくねとした道は一本道で、周りはひたすらに草や木が密集している。

（めちゃくちゃ、獣道なんだけど！　これっていいの？　このまま付いてっても本当に平気なの？）

ちょっと泣きたい気分になってきた。

急に不安な気持ちが胸をしめていく。

これからどうなっちゃうんだろうという不安と、見ず知らずな男と二人きりという危機感。

実はさっきまで、ちょっとこれは夢かもしれないと思っていたんだ。

けど、時間が経てば経つほど、現実味は増していく一方で、いよいよこれが夢じゃないというのが、決定的に思えてきた。

「到着。ココ、俺ん家な」

そんな私の気持ちを他所に、サガラは小さな建物の前で立ち止ま

った。

「サガラの家？」

目の前には、小さなレンガ造りの建物。

三角屋根の小さなその家は、おとぎ話とかに出てきそうなレトロな趣がある。

「ほら、サッサと入れ」

入り口前で足を止めた私に、サガラが怪訝な顔をする。

ちょっとこいつ、デリカシーがなさすぎじゃない？

女の子が知らない男の家に入るなんて、どんなに勇気のいることか。

そういうの全然分かってないみたいだ。

「ユーミ？」

「わ、わかったわよ」

ここまで来たら、ごねたって仕方ない。

私は意を決して家の中に入ったのだった。

（4）

「で、どういうことなのか、早く教えてよ」

精一杯の虚勢で、私は一オクターブ低い声でそう不遜に言い放つ。

「おいおい。何でそんなに偉そうなんだよ。ま、いいけど」

軽く肩を竦めてみせてから、サガラは改めて口を開く。

「大体察しはついてるだろうが、ここはユーミのいた世界とは別の世界なんだ」

サガラの言葉にうんうんと頷く。

ここは、私の世界とは違いすぎる。

だから、そのことにはあまり驚かない。

「でだな。ユーミは、次元の穴を通ってこの世界に来たんだ」

「はい！　質問です」

私は、サガラの言葉にビシッと手を挙げる。

「なんだ？」

「私、自分の部屋から出たら、目の前に穴があったわけ。それが、次元の穴ってこと？」

当たり前の話ながら、今まで一度たりともそんなものがあったことはない。

それが、今日唐突に出現したのだ。

「正解だ。そうだな。それが次元の穴だ」

出来のいい生徒を褒めるような口調で、サガラはそう答える。

「更に質問！」

頷きサガラは手をちょっと上げて、私へ言葉を促す。

「それがどうしていきなり人の家の廊下に出来るのよ」

「それは運がなかった……いや、ある意味あったのか？　次元の穴つーのは、この世界の賢者が作りだしたものなんだ。何でも色んな世界と国交を交わしてみよう。つーお偉いさんの思いつきで始まったいわば、実地試験みたいなもんだな。けどよ、うまく選んだ場所に作りだせないらしくてな」

ため息交じりにサガラはそう答える。

「……で、運悪くその失敗の次元の穴が、私の部屋の前に開いちゃったとか？」

「おっ、物分りいいじゃん。そういうこと。情けないことになかなか安定出来なくてよ。いいかげんやめちまえばいいのに、言い出したのが頭の固い連中ばっかで、もはやあれは意地だな」

「それって、私は被害者じゃないの！　それが何で檻に入れられたり、売られたりとかしちゃってるわけ！？　普通そういう場合は、丁重に扱うでしょっ」

「最初は丁重だったんだよな。けどよ、ここ何年かでけっこうな数の異世界人が落っこちて来ててな。対応出来なくなっちまったらしい」

「……」

あきれて声も出ないとはこのことだ。

ここの人たちは、馬鹿ばかりなんだろうか？

迷惑この上ない奴らだわ。

サガラも私の気持ちを感じ取ったのか、苦笑している。

「で、考えだされたのが、城下の民に押し付けちまおうってことだ」

「押し付ける？」

なんだろう。

頭痛くなってきた。

この先を聞いたら、何だか後悔することになりそうな気がする。

でも聞かないわけにはいかないので、私はサガラの話に耳を傾ける。

「ようは、落ちている異世界人は見つけた奴のものってことだ。非人道的でなければ、何をしても構わない。見つけた奴が、自動的に異世界人の所有権を得るってことだ」

「私って売られてたんじゃないの？　それって非人道的って言わない？」

「うーん。売買はギリセーフらしい。まぁ、出来たばっかりの法律で色々アバウトだからな」

ううん。そもそも“所有権”って言っている時点で、もはや人道的云々以前の問題だ。

ここの人たちと、私の世界の常識はかなりずれているのかもしれない。

クラクラとする頭を押さえて、何とか自分を納得させようと努力する。

「因みに、ユーミは5クルーで買い取った」
「5クルー！？」

この腕輪は、金銭感覚も分かるらしい。
その値段がどれだけ安いか、私にもしっかりと分かる。
運悪く異世界に飛ばされて、通りがかりのおじさんに捕まって檻に入れられて売り物にされて、その上、超お買い得商品としてサガラに買われたと……。

「て！　冗談じゃない！！　馬鹿馬鹿しすぎて話になんないっ。私は売られたことも買われたことも納得してない。出ていくわ！」

このままここにいても、何をさせられるか分かったものじゃない。
ここでずーっと暮らすとかありえないし。
ともかく役人でもなんでもいいから捕まえて、元の世界に還せと直談判だ。
私は外へ続く扉のドアノブに手をかける。

「ふーん。俺は別に構わないけどよ。さっき俺と戦ってたじーさん。えらくあんたを気に入ってたんだよな」

サガラのその言葉に手が止まる。

「それが何よ？」
「だからさ、あのじーさんと俺で、勝ったほうがお前を買い取るって話だったわけ。で、俺が勝ったわけだけどさ、あのじーさんは、あんたで色々人体実験するつもりだったらしいぜ」

その言葉に血の気が引いていく。

「かなり未練ありげだったし、もし見つかったら即効攫われて、あーんな実験とかこーんな実験されちまうだろうから、気をつけろよ」

無駄に爽やかっぽい笑みを浮かべて、サガラはそう言い放つ。

「非人道的行為は禁止なんじゃないの？」

「なにせ、出来たばっかの法律で色々アバウトだからな」

またも同じ台詞を繰り返す。

ようは、そんな法律あってないようなものってことなのか……。

それが脅しだと分かっていても、ここから出ることを躊躇ってしまう。

「……そういうあんたは、私をどうするつもりなの？」

私は恐る恐る訊ねる。

「俺？　あぁ。そうだな……」

て、何で今から考えるみたいな感じなのよ。

「そうだな。炊事洗濯係みたいな。身の回りのことをやってもらいたいんだが」

暫くの思案ののち、サガラはそう答える。

つまりはお手伝いさんてことだよね？

でも、こいつのこと信用しても大丈夫なのかな？

「俺、役所に知り合いいるし、働きによっちゃー元の世界へ戻れるように頼んでやるぞ」

悶々と葛藤している私に、サガラはとどめの一言を放つ。

「……よろしくお願いします」

私はペコリと頭を下げた。

こうなったら腹を括るしかない！

もし身の危険を感じたら逃げればいいんだ。

よし。そうしよう。

「決まったな。よろしく。ユーミ」

サガラはニッと笑って手を差し出す。

私はその手を取る。

「不束者ですがお願いします」

こうして、それはもう突然に、私の異世界生活が始まったのだった。

2章　異世界ライフスタート！（1）

私の異世界生活決定直後、絶世の美女がやってきた。

ウェーブがかった長めの明るい金髪。

肌は透けるように白く、大きな瞳はくっきり二重で赤みがかかった茶色。

スッと通った鼻筋、綺麗に整えられた眉。

ともかくすべてが完璧で、まるでハリウッド女優が雑誌から飛び出してきたかのような感じ。

女の私ですら見惚れてしまう超絶美人さんだ。

「ふふ。始めまして。私はジュリアっていうの」

「は、始めまして。ユーミです」

声まで綺麗だし。

でも、彼女に目がいく理由はそれだけじゃなかったりする。

スレンダーなのに胸が大きい。

スタイルがいいって話なんだけど、その服装がすごい。

簡単に言ってしまえば、赤のニットワンピースなのだけど、胸元がガッツリと開いていて、胸が見えるか見えないかっていうギリギリ。

下はこれも恐ろしいくらいの短い丈で、太ももまで惜しげなく半分以上見せている。

それでも厭らしい感じはないし、完璧なプロポーションだから、まったく違和感がない。

（ちょっと落ち込む）

よれたパジャマ姿で小汚い私と彼女が並んで一緒にいるなんて、あまりにも滑稽すぎるよ。
そんなことを思って、密かに暗くなっている私を、ジュリアはジーッと見ている。

「あ、あの……」

あまり見られたくない。
ていうか、むしろここから逃げだしたいほど、居たたまれない。

「なんて可愛らしいのかしら」

と、ため息と共に漏れたジュリアの言葉に耳を疑う。

「え？　あの？？」
「すごく可愛い！　サガラ、こんな可愛い子だなんて一言も言ってなかったじゃない！」

我関せずって感じで、剣の手入れをしていたサガラは、ジュリアの言葉に、面倒臭そうに顔を上げる。

「相変わらず、ジュリアの趣味はよくわかんねー。ま、ともかく適当に頼むわ」
「頼むってなに？　何の話？」

私にはまったく説明がないんだけど、どういうことよ。

「サガラに、あなたの洋服を持ってきてほしいって頼まれたの」

そう言われれば、ジュリアは大きなトランクを持っている。

「あ、でも、私お金とか持ってない」

なにせ体一つで飛ばされてきたから、本当に何も持っていないし、そもそもコチラの世界のお金なんてなお更ない。

「お金なんていらないわよ。だってサガラの大切な子だもの。そんなこと気にしないで」

「ジュリア……」

ジュリアは本当の天使かもしれないと思う。

なんていい人なんだろう。

「ただの特売品なんだけどな」

と、入れなくてもいいツッコミを入れるサガラ。

（なんて余計な一言をっ。けっこう気にしてるのに！）

私が軽く睨むと、サガラはフッと鼻で笑う。

「ふふ。サガラってば、こんな可愛い子を見つけだすなんて。さすがだわ」

嫌味……じゃないのよね？

こんな絶世の美女に言われても、何だか素直に喜べない。

というか空しい。

「本当はもっと使えそうなのがよかったんだけどな。こんなのしかいなかったんだよな」

こちらは明らかに嫌味だ。

私を見てワザとらしく肩を竦めて、ため息を付くサガラ。

「こんなので悪かったわね。あなたデリカシーなさすぎ！」

「デリカシーねぇ。そういうのは、人を選んで使うもんだろ？」

そんなことを言いながらまたも鼻で笑う。

「それってどういう意味なわけ？」

「そのままの意味じゃん」

む、むかつく。

なにこいつ。

ちょっとイケメンだからって、性格悪すぎるわ。

「まぁ。二人はもう仲良しさんなのね」

ジュリアがニッコリと天使の笑みでそんなことを言う。

「「どこが」」

うっかりサガラとハモッてしまった。

「うふふ。以心伝心ね」

いやいや、だから違うし。サガラも苦い顔をしている。

ジュリアは、相当な妄想癖があるらしい。

「そ、それで、服ってどんな感じ？　見せてもらってもいい？」
なんだかこのまま話をしていても不毛な気がするから、サクサクッと話を進めてしまおう。
「もちろん！　可愛いのをたくさん持ってきたから着てみてね」
ウキウキとした感じでトランクを開ける。
中には、派手派手……いやいや、カラフルな服がいっぱいだった。
「この赤い服とかお勧めなの。あら？　私とおそろいみたいね。ふふ。それでも嬉しいけど」
うん。可愛い。確かに可愛い服だ。
けど、それが実際私に似合うかは別な話だ。
そんなキラキラワクワクした瞳で見つめられても、私にこんな可愛すぎる服を着る勇気はない！
「さぁ！　その服を抜いてどんどん合わせてみましょうね♪」
「あはは。お、お手柔らかに」
しぶしぶパジャマのボタンに手をかけようとした時、ハタッと重要なことに気が付く。
「て！　サガラもいるしココで着替えるとか無理。どこか別室に……」
「バーカ。お前の貧相な体見たってどうってことねぇつーの」
その言葉に、私は服と一緒においてあった靴をサガラに投げつけ

る。

「痛っ！　てめー、何しやがるっ」

「サガラ、女の子はデリケートなのよ？　少し席を外してくれるかしら」

涙目の私の頭をヨシヨシとなでながら、笑顔ながら有無を言わさない声音でサガラに言い放つ。

「へいへい。サッサッとしろよ」

ため息一つついて、サガラはその部屋を出て行く。

やっぱりあいつは最低だ。

これからココであいつと一緒にいなきゃなんて、うまくやる自信がないわ……。

（2）

「ごめんなさいね。ユーミ」

間逆センスのジュリアと攻防を繰り広げつつ、やっと服選びも終盤にさしかかっていた時だった。

「なにが？」

ジュリアに謝ってもらうようなことは何もない。

服選びを手伝ってもらって、何とか私とジュリアが納得する服を選ぶことが出来た。

空色の薄手のワンピースをキュッと太いベルトで絞めたもの。スカートは膝上で胸元もけっこう開いているけど、それを白いロングのニットカーディガンを羽織ることで、体型を少しは隠してくれる。

足も細いしウェストのくびれもバッチリなのだからと、カーディガン反対のジュリアを何と宥めて、やっとこの格好に落ち着いた。

本当なら、空色のワンピースなんて可愛らしいセレクトは好きじゃない。

だけど、ジュリアの意見を取り入れて、ギリギリの妥協だった。

「このワンピースのことなら、私も段々気に入ってきたし、心配しなくても大丈夫だよ」

「ううん。その服は文句なしに可愛いから平気よ。そうではなくて、サガラのこと」

「あー、うん」

それは心配な方かも。
あいつとうまくやっていけるか、かなり問題だわ。
「あの子ったら18にもなって、子供っぽくてわがままなところがあるのよね。困ったものだわ」
そう言いながら、ジュリアはすごく優しい顔をしている。
「ジュリアはサガラの恋人なの？」
ずっと考えていたけれど、サガラとジュリアの関係が見えてこない。
長年一緒にいる恋人同士っていうのが、何だかしっくりくる気がする。
「やだ！　それはまったくの誤解よ。サガラとは離れて暮らしているけれど、姉と弟っていう関係なのよ」
「えぇ！？　だって全然似てないじゃない」
本当に似ていないのだ。
二人とも整った顔立ちをしているけれど、サガラは東洋系の顔立ちだけど、ジュリアはどう見ても西洋系だ。
根本的に違う。
「あ、もしかして、血は繋がってない……とか？」
「ううん。父も母も同じ。正真正銘血の繋がった姉弟よ」
なぜかそう言ったジュリアは、ほんの少しだけ悲しそうに見えた。

「ご、ごめん。無神経なこと聞いちゃって」
「よく驚かれるのよね。だから、けっこう慣れっこだから平気なの。気にしないで」
にっこり笑顔のジュリアだけど、このことはあまり触れられたくないのかもしれない。
「ふふ。それにしても、サガラから助けてほしいって連絡を受けた時は、どんな凶暴な異世界人かと思ったけれど……」
「凶暴？」
一体、サガラはどんな風に私を説明したのよ。
「あら、サガラから聞いていない？」
何のことか分からず、私はブンブンと首を横に振る。
「前に落ちてきた異世界人はすごかったのよ？　何でも人食い人種だったとか。捕獲者は、危うく食べられちゃうところだったの。時々、そういう異世界人が落ちてくるのよ。だから私はてっきり、そういう類の異世界人なんじゃないかって思ってたの」
なるほど。捕まった時の檻とか鎖とかは、そういうことだったんだ。
周りも妙におっかなびっくりだったし。
まさしく、取って喰われそうになったことがあるからだったのね。
かなり笑えない話だ。
ぼんやりそんなことを思っていると、ジュリアが私の手をギュッと握った。

「ユーミ。これから、サガラをよろしくね」
「あ、うん」
キラキラとした微笑を向けられ、私は思わず頷いてしまったのだった。

（3）

それから、サガラの家での生活が始まった。

炊事洗濯、掃除に買い物。

私の仕事は本当にそんな感じだ。

もともと両親は共働きで大体のことは出来るから、案外苦にならない。

洗濯機とか掃除機なんていうものがないから、全部手作業で、最初のうちは苦労したけれど、慣れてしまえば、どうってこともない。

（私ってけっこう図太い神経してるかも？）

自分でも驚くくらいに、ここでの生活に順応している。

相変わらずサガラは嫌みだけど、意外にも対応は紳士的だったりする。

買い物には毎回付いてきて、荷物を持ってくれる。

夕食の時間はきっちり守るし、出した食事はどんなものでも完食してくれる。

私の部屋には入らないし、家事をちゃんとこなせば後は自由時間にしてくれるし。

あれ？　何だか意外に快適ライフじゃない？

「おかしいわね」

「何がだよ？」

ただいま夕飯中。
私が作った炒め物をモリモリ食べながら、サガラが私の独りごとにツッコミを入れる。
「なんだか、異世界にいるのに私、めっちゃ順応してるのよねぇ。むしろ、勉強とかしなくていい分、楽ちんみたいな？」
「そりゃあ、何よりだ。おかわり」
「あ、はいはい」
差しだされたお皿にこれでもかと料理を入れる。
「どーぞ」
「おぅ」
ホクホクした顔でそれを食べるサガラ。
作ったものをおいしく食べてもらえるのって、けっこう嬉しかったりするんだよね。
そんなことを思ってお茶を啜る。
「うふふ。新婚さんみたいね」
と、聞こえてきたその声に私はお茶を吹き出し、サガラは炒め物でむせている。
「あらあら。やっぱり仲良しさんね」
生温かい眼差しを向けてくるジュリア。
そうなのだ。今日はジュリアが遊びに来ていて、一緒に夕飯を食べていたのだ。

「ジュリア、はっきり言っておくけど、サガラと私はただの同居人なんだからね？　変な誤解しないでよ！」
「そうだっ。こんなのに手を出すほど女に飢えてねーよ」
「って！　“こんなの”って何よ！？　他に言い方あるでしょうっ」
「ぎゃんぎゃんうるせーし。色気の欠片もねーしな」

意義を唱える私に、更に失礼な発言を追加する。
私だって黙っていられない。

「なによ！　サガラだって、食っちゃ寝ばっかだし、ダラダラして全然ダメダメじゃん」
「自分の家でくつろいで何が悪ぃんだよ！　大体、きっちり労働してるつーの」
「労働って行ったって、フラリと出てってすぐ帰ってくるし、何の仕事してるわけ？」
「……」

ん？　あれ？？

そっぽを向いて黙っちゃった。
何だか、拍子抜けしてしまう。

「そこまでね。うふふ。本当にこの家も賑やかになってよかったわ。こんな良いお嫁さんが来てくれるなんて、私も安心したわ」

うっとりした顔で問題発言。
ていうか、妄想がひどくなってるわよ、ジュリア！

「ツッコむ気も起きねー」

ガックリ項垂れるサガラに、今回ばかりは激しく同意したい気持ちの私だった。

3章　出会い（1）

今日の一日は掃除デー。

ある晴れた日、私はそう決めた。
実はこの家で一つだけ、未知の領域があるのだ。
サガラの中で物置と位置付けられた部屋。
よく分からないガラクタがたくさんあって、無造作に本が積まれていたりするその部屋は、一面埃が厚く積もっている。

「いくらなんでも、掃除しなさすぎだし」

テーブルにツツッと指を軽く動かしただけで、埃が大量に舞い上がる。

「さーてっと！　サクサク綺麗にしちゃおう」

とりあえず、片っぱしらからゴミらしきものを捨てにかかる。
と言っても、ほとんどがゴミに見えてしまうんだけど。
ポイッポイッと軽快に袋へと放り込んでいく。
テーブルに置かれていた、金網の箱を捨てようとした時、箱の中から何かが飛び出した。

「あれ？」

視線を向けようとした時、それが私目がけて飛んでくる。

「なっ。いやぁ！！」

未知のそれを確かめる前に、私は反射的にそれを手を振りはたき落とす。

「い、痛いです……」

小さな男の子の声。

「え？」

一瞬空耳なのかと思った。

だってこの部屋には私しかいないし、隠れるところだってありそうにない。

「いきなりはたき落とすなんてひどいです」

キョロキョロする私の耳に、そんな言葉が聞こえてくる。

「へ？　はたき落とすって……」

「下です。あなたの足元」

私は声に従って素直に足元を見る。

「な、なにこれ！？」

最初は暗くてよく見えなかったけれど、目を凝らしていると、そこにはおかしな生き物が座り込んでいた。

「“これ”って……ひどいです」

それはひどく気分を害したらしい。
けれど、そんなことは今問題じゃない。
私の頭の中はパニック状態だ。
（虫……虫なの？　え？　でも、しゃべる虫っているんだっけ？）
そんなことを考えて頭を抱えていると、虫？はいきなり飛び立ち私の目の前で止まる。
「嘘……ひと？」
そこにいるのは、まさしく人間だった。
見た感じは、小学校低学年くらいの男の子。
クルリとした可愛い目とサラサラとした髪。
どこぞのお坊ちゃんみたいな、育ちのよさそうな雰囲気がある。
ただ大きさが手のひらサイズで、背中に蝶みたいな羽をつけているけれど。
「はじめまして。僕はザットといいます」
いきなり自己紹介をすると、丁寧にふかぶかと頭を下げる。
「は、はじめまして、ユーミです」
唐突な出来ごとについていけなくて、呆気にとられたまま挨拶を返す。
ザットはえへへっと、何だか和む笑みを浮かべている。

埃だらけゴミだらけの部屋で、小さな可愛い男の子と丁寧なあいさつ……てっ！
なにこれ！？　どういうシチュエーションよ！
どこからツッコミを入れたらいいの？
それとも、あえてのスルー！？

「なんだ。起こしちまったのか」

混乱している私の後ろから不意に声がして、振り向くとそこにはサガラが立っていた。

「あれ？　サガラ、仕事じゃなかったの？」

混乱ついでに、普通にそんなことを聞いてしまった。

「終わったから、帰ってきたんだろーが」
「そ、そう」

サガラが出かけて、一時間と経っていない気がするんだけど。
ホント、こいつって何の仕事しているわけ？
何てことを思いながら、不審な眼差しをサガラに向けると、何やら口元がモゴモゴと動いている。

「えーと、何を食べているのかしら？」

何となく嫌な予感がする。

「テーブルの上に、クッキー？　だっけか。が、あったから食っておいた」
「なっ。あれは、ココの掃除終わったらおやつに食べようと思って

たのよ！？　まさか、全部食べちゃったの？」
「これが最後だな」
そう言いながら、シレッとした顔で持っていたクッキーを口の中に放り込むサガラ。
「あー！　楽しみにしてたのにっ」
「はんっ。俺に黙っておいしいもの独り占めしようなんざ、甘いぜ」
私の悲痛な叫びを意にも介さず、サガラは憎たらしい顔で言い放つ。
「それは、昨日焼いたやつの余りだもん！　サガラは昨日いっぱい食べたじゃん」
そうなのだ。
昨日、小麦粉っぽい食材を見つけたから、試しにクッキーを焼いてみたところ、サガラはそれをいたく気に入って、大皿一杯のクッキーを完食したのだ。
形の悪い分は、今日のおやつにしようと思って、別に保存しておいた。
サガラが出かけたから、油断してテーブルに置いておいたのがいけなかったらしい。
「昨日は昨日。今日は今日だ」
「なにその屁理屈！　大体、私が作ったんだよ？　食べるなら普通許可取るでしょ！？」
「お前の作ったものは俺のものだろ。なんで許可がいるんだよ」
「いるわよ！　なに、その俺様発言！！」
「小せーことでギャンギャンうるせーな」

「小さくないし！　食べ物の恨みは恐いんだからっ」

開き直って涼しい顔をしているサガラを私はおもいっきり睨みつける。

「あのー、お話中すみません」

おずおずという感じで、ザットは私とサガラの間に割って入って来た。

「うわっ」

おもいっきり、ザットのことを忘れていた。

「そ、そうだわ。この子は一体誰？」

思わず熱くなって恥ずかしいところを見られてしまった。

「精霊」

サガラは面倒臭そうに一言をだけ放つ。

（2）

「精霊？」

思わず、ザットを指さして同じ言葉を疑問形で呟く。

「はい。半人前ですが精霊です」

照れたように頭をかきながら、ザットもそう答える。

「何だよ。お前の世界には、こういうチビすけはいないのか？」

ポカンッとしている私を見て、サガラは意外そうな顔をした。

「いるわけないじゃん」

そりゃ世の中には、精霊を見たことがある。

なんていう人だっている。

けど、私自身はそんなのまったく信じていなかったし。

「ふーん。お前の世界って変なとこだな」

変……なのか？

私には、羽を付けたこんなちっちゃな男の子が『精霊です』なーんて現れちゃうこの世界の方が変だと思うんだけど。

いやいや。でも、そんなこと言いあったって、何の解決にもならない。

「それで？　どうしてザットがこんな埃まみれの籠の中にいたわけ？」

とりあえず細かいこと（？）は気にせずに話を続ける。

「あぅ。えっとですね。僕はまだ半人前なので、少しだけ眠らなくちゃいけなくて、それでここで寝ていたのです」

まるでうっかりうたた寝しちゃった的に言っているけれど、こんな埃まみれの部屋で、よく眠れると思う。

「煩くしちゃ悪ぃし、この部屋には入らねーようにしてたんだけどな。お前が騒いだ所為で起きちまったんだな」

「何それ。サガラ、確かこの部屋“物置”って言ったわよね？　もしかして、ザットの存在忘れていたんじゃないの？」

「ばっ。お前、んなことねーよっ。馬鹿いうなよな！」

冗談で言ったつもりだったのに、サガラの声はおもいっきり上ずっていて激しく動揺している。

図星だとバレバレだ。

「うわっ。人でなし」

「サガラ、ひどいです……」

私の軽蔑を込めた眼差しと、ザットの潤んだ瞳を向けられ、サガラはバツが悪そうに顔を顰める。

「ぐーすか、何年も寝てる奴が悪ぃんだろ」

「何年も！？」

開き直ったサガラのその言葉に、思わず私は声を上げる。
確かにこの部屋は、何年も人が入っていないような、そんな埃の積もり具合ではある。
精霊の“少し”は、人間の感覚とは違うものらしい。

「すみません。ですが、もう大丈夫です！　だから、その……」
「別に起きてからもココに居てかまわねーよ。ちょうどいい。俺がいない時のこいつのお守、お前がしろ」

言い淀んでいるザットにぞんざいに言い放つ。

「はい！　僕、がんばります」

キラキラとした瞳で、満面の笑顔のザット。
よかった。何だかよく分からないけど、嬉しそうなザットの姿に、私までほのぼのする。
ん？　あれ？？　でも、“お守”って……。

「サガラ！　“お守”ってなによ。どちらかといえば、私の方があんたの世話してるのよ！？」

なのに、まるで厄介者みたいな言い草は心外だ。

「間違ってねーだろ？　お前はこの世界に来て日の浅いヒヨっ子だろーが」

意地の悪い笑みを浮かべて、私の顔を覗き込む。

「うっ」

それは確かにそうかもしれない。
まだまだこの世界で分からないことも知らないことも多い。
「“お守”つーか、“子守”とも言えるか。なっ？　ヒヨっ子」
それはもう嬉しそうに勝ち誇った顔のサガラ。
むかつくけど、間違いでもないので言い返せず、私は押し黙る。
「ユーミ。これからよろしくお願いします」
「あ、うん。よろしく。ザット」
器用に空中でお辞儀するザットに、私も慌てて頭を下げる。
あぁ。礼儀正しいいい子だな。なんか癒される。
「ふぅ。でも、僕知りませんでした。サガラが、ご結婚されたなんて。なるべく、お邪魔はしないので、安心してくださいね」
ちょっと照れたような顔で、ザットは恐ろしいことを口にする。
「……」
「……」
絶句するサガラと私。
「「違うっ！！」」
そしてものの見事にハモりを聞かせてしまうサガラと私。
その後、小一時間ほどザットの誤解を解くために費やされる羽目になったのだった。

（3）

新しい同居人、精霊のザットが加わって数日経ったある日の夕方。
私とザットは市場へと買い物に来ていた。

「ちょっと遅くなっちゃったね」

市場は誘惑が多い場所だ。
今日は珍しい大道芸人が来ていて、こんな時間まですっかり魅ってしまっていた。
人と物でごった返すそこは、私が売りに出されていた因縁の場所でもある。
最初の頃は、おっかなびっくりだったけれど、今ではすっかり慣れ親しんでいたりする。
最近知ったことだけど、この世界で黒髪黒い瞳というのはとても珍しいことらしい。
その所為か時々、奇異の眼差しを向けられたりもするけれど、今ではへっちゃらになっている。

「サガラがおなかを空かせてまっていますね」

隣をパタパタと飛ぶザットが、真面目な顔でそんなことを言う。

「あはは。そうだね」

まるで、子供を気にかける母親みたいなザットの言葉に、思わず笑ってしまう。

平気なのはきっと、この世界で『家族』みたいな『仲間』が出来たからだ。
サガラやザットやジュリア。
それに、少しずつ市場でも顔なじみが出来始めている。
一人じゃないと思えば心強い。

「今日の夕飯は、何にするんですか？」
「ハンバーグにしようと思ってるんだけど」

ハンバーグはサガラの好きなメニューの一つだ。
最近仕事が忙しいとかで、サガラは外出していることが多い。
ジュリアがこっそり教えてくれたんだけど、どうやら私が来たばかりの頃は、仕事を控えてくれていたらしい。
そんな話を聞いちゃったら、なにもしないわけにはいかないじゃない？
今のところ、サガラが喜んでくれる私が出来ることは、料理くらいだもの。
たまには、あいつの好きなものを作ってもいいかなって思ったんだ。

「それでは、ちょっと失礼しますね」

ザットが私の額に手をかざす。

「分かりました。えっと、ザイとハサシの肉。それにロアの実です。売っているのは、西通りの……」

私の世界とこちらの世界では、食材の名前が違ったりする。
だから、前はいちいち店を端から渡り歩いていたんだよね。
それが今では、こうしてザットが道案内をしてくれるんだ。

ザットは額に手を置くと、私のイメージする食材を読み取れるらしい。
私の世界じゃ考えられないことだけど、すでに“精霊”とお買いものに出かけている時点でありえない事態だもの。
もうちょっとやそっとのことじゃ驚かないわよ。

「ふふ。馴れって恐いわよね」
「どうかしましたか？」
「ううん。なんでもない。行こう……」

そう言いかけて、ふと耳に届いた声がひっかかった。
ううん。それは声じゃなくて歌だ。
人が多いこの通りのどこからか、聞いいたことのある歌が聞こえる。
それは私が大好きなバンドのもの。
私の世界の住人なら、誰でも一度は耳にしたことがあるんじゃないかってほどメジャーな歌。
でもここは異世界。
それなら、この歌を歌っているのは……。

「ユーミ？」

突然固まってしまった私に、ザットが小首をかしげている。

「ザット！　ちょっと待ってて」

説明する時間も惜しくて、私はそう言い捨てると歌が聞こえる方へと走り出す。
人をかき分けて、切れ切れに聞こえてくるそのメロディを頼りに前に進んでいく。

ほどなくして開けた広場の一角に、小さな人だかりを見つける。
歌はその中心から聞こえてくる。

『君に出会うために僕は……』

聞きなれたフレーズとメロディ。
ああ。やっぱりだ。
胸が高鳴る。
しかも、まるで本人が歌っているかのような完璧なコピー。
かなりうまいのだ。
人だかりの一歩後ろで、思わず聞き惚れてしまう。
最後まで歌いきると、大きな拍手が周りから起こる。
そうして、人垣が崩れていき、声の主の姿が見える。

そこには赤い髪の少年がいた。
年は私と同じくらいかもしれない。
猫のようなつり上がりがちな大きな目は、どこかひとなつっこさを感じる。
格好は光沢のあるグレーの詰襟を、胸元を開け放ち着崩している。
もしかしたら、どこかの学校の制服なのかもしれない。

自分と同じ世界の人。

そう考えたら、ものすごくワクワクしてきた。

「はぅ。ユーミ。やっと追い付きました〜」
「あ、ザット。ごめんね。いきなり走ったりして」

パタパタと飛んできたザットは、少しフラフラしている。
小さなザットには、付いてくるのも大変だったみたいだ。

「大丈夫ですけど、どうかしたんですか？」
「うん。それがね……って！　行っちゃう！！」
雑踏に消えかかっている赤毛の少年の元へ走り寄ると、思わずヒラリと風に揺らいだ詰襟の裾を掴む。
「は！？　なんだ？」
動きを止められた相手は、ものすごく怪訝な顔をして振り返る。
と、バッチリと目が合ってしまった。
私が裾をガッチリと掴んでいるのを見て、驚いたように目を瞬かせ、「何なんだ？」というように、不審そうに私を凝視している。
そりゃそうだ。
いきなり服を掴んでひきとめられても、意味分からないって感じだろう。
「ＳＨＡＤ……」
言いたいことがたくさんありすぎて、ものすごく端折って、私の口からは歌の題名が口を付く。
ますます意味分からないって顔されているし！　うわっ。変な女だって思われてるわよね。これは。
「さっきの歌がどうか……」
怪訝な顔のまま口を開いた赤い髪の少年は、言いかけて目を見開く。
「さっきの歌の名前。え？　うわっ。なに、君。もしかして、日本

人だったりするわけ？」
「うん！　もしかしてあなたも？」
聞くまでもなく、この反応はそうなんだろうと思うけれど、私も聞き返してみる。
「おうっ。すっげー！　まさか、こんなとこで同じ世界の住人に会えるなんてな」
赤毛の少年は満面の笑顔を浮かべた。
これが、時夜との初めての出会いだった。

（4）

小野上時夜（おのがみときや）。
それが彼の名前だ。
なんと年も私と同じで、元の世界では、住んでいる場所もけっこう近いということが判明した。

少し話をしたいからと、ザットには先に帰ってもらって、広場の一角にあるベンチに二人で座る。

「時夜は、どうやってこの世界に？」
「ああ。さっき、優美に聞いたのと同じような状況。俺の場合はスタジオだったけど」
「スタジオ？」
「そう。俺、バンド組んでるんだ。無名の駆けだしなんだけど」

その言葉で何となく納得する。
時夜の赤い髪は、きっとバンドをしているためだろう。
でもそれが逆に、この世界では違和感なく溶け込んでいる。

「そうなんだ。どおりで歌がうまいはずだよね。さっき、思わず聞き惚れちゃったもん」

私の言葉に、時夜は照れたように頬をかく。

「そう言ってもらえると嬉しいな。たまに歌ってるからさ。今度また聞いてくれる？」
「うん！　ぜひっ」

こうして同じ世界の人と仲良くなれるのは、また違った嬉しさがある。

「優美はどこに住んでるんだ？　なんかさっき小っこいのいたけど、あれ精霊だよな？　もしかして、精霊に拾われたとか？」

「ううん。今の子も一緒に生活してるけど、私を拾ったのは別の人。今はそいつの家でお手伝いさんみたいなことしてるの」

「マジ？　それって大変じゃん。大丈夫なのか？」

時夜が気遣わしげに、私の顔を覗き込む。

その表情から心底心配してくれているのが分かる。

「うん。別に無理やりやらされている訳じゃないし。けっこううまくやってるよ」

まさか、意外に快適ライフとも言えなくて、あやふやに笑ってごまかす。

「そうなのか？　なぁ、もし嫌なら逃げて俺のとこくれば？　俺、一人暮らしだし、ここに来て一年近く経って生活も安定してるんだ。優美なら大歓迎だしさ」

「えぇ！？」

サラリと出された時夜の提案に驚いて思わずおかしな声が出る。

そりゃ、同じ世界の人が一緒なのは心強いし、何だか安心する気がする。

だけど、一緒に住むとなると話は別だ。

「えーと。その、実は今住んでいるところって、嫌いじゃないんだ。

それに、私がいなくなったら、あいつも困るだろうしね」
サガラが掃除や料理、洗濯する姿なんて想像できない。
まして、小さなザットにサガラの世話は無理だろうし。
それにだ。あそこにいれば、元の世界に帰れるかもしれないんだから、やっぱり離れるわけにはいかない。
「残念。フラレたか。でもさ、気が変わったらいつでもどうぞ」
「あはは。ありがと」
そう言ってウィンクした時夜は、けっこう様になっている。
元の世界では、きっとモテるんだろうなぁとか、ついつい考えてしまう。
サガラとは違って、本当に気さくな感じですごく好感が持てる。
「あ！　私、そろそろ戻るね」
気がつけば、少し日が傾きかけている。
いつもならとっくに夕飯の準備にかかっている時間。
いくらザットが先に帰ったとはいえ、きっとサガラは不機嫌に違いない。
慌てて経ちあがった私の手を、時夜は掴み引きとめる。
「……俺、優美に会いに明日もまたココに来るから。毎日会いたいんだ」
「時夜？」
夕闇が迫っている所為なのかな？
さっきまでの明るさが影をひそめて、時夜の声はどこか強張って聞こえる。

縋るように見つめられて、言葉に詰まる。
何だか思考力が低下していく感じがするのはなんでだろ？
思わず、何も考えず肯いてしまいそうになった時、サガラの顔が唐突に過って、慌てて我に返る。
「ま、毎日は無理だと思う。でも、時々なら」
私の返答に、時夜はちょっと意外そうに目を瞬く。
「ほ、ほら、一応、私居候だし。家のこととかやらなきゃだから」
そうだ。だからサガラの顔が過ったんだと思う。
手を抜いて小姑みたいにチクチク言われたら、溜まったものじゃないもん。
「そう……だよな」
まるで捨てられた子犬みたいにシュンとされて、何だかちょっと良心が痛む。
「でも、なるべく会いにくるよ。時夜の歌、また聞きたいし」
慌ててそう付け足す。
「あぁ。俺、待ってるから」
繋いだままの手に力を込めて、屈託のない笑顔で時夜は肯いた。

（5）

時夜と別れて、急いで残りの買い物に向かうため市場を目指す。

「あれ？」

「ユーミ」

広場を抜けたところで、先に帰ったはずのザットと出くわす。

何だか、浮かない顔をしているように見える。

「どうしたの？　先に帰ってていいよって言ったのに。もしかして待っていてくれたの？」

「はい。ユーミが心配でしたので」

私の問いにコクリと肯き、相変わらず何だか表情が暗い。

本当にどうしちゃったんだろう？

「帰り道ならちゃんと覚えているから大丈夫だよ。それより、何だかザットの方が具合悪そうだけど、大丈夫？」

「はい。あの、僕が心配なのは、先ほどの方のことです」

「時夜？　あ、別に変な勧誘とかナンパとかじゃないんだよ。驚いたことに、私と同じ世界の人だったんだ」

「そう……なのですか。でも、何だか嫌な『気』を感じて」

ザットは精霊だからなのか、人の感情には敏感だ。

それにしても、あんなに屈託のない時夜から、嫌な『気』を感じるなんてどういうことなんだろう？

思わず、考え込んでしまう。

（あ、もしかしたら、時夜はこの世界の人にいい感情を持っていないのかな？）

私だって突然この世界に飛ばされて、サガラから説明を聞いた時、ホントふざけるなって思ったもの。

そうであっても不思議はない。

その感情が、ザットに伝わったって考えられる。

うん。それなら納得がいく。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ」

「はい。でももう関わらない方がいいと思うのです」

ザットはすごく真剣な面持ちでそう言い放つ。

「そっか。うん。分かった。ほら、早く買い物済まして帰ろう」

あんまりザットが心配そうな顔をするから、『また会いたい』って言われているなんて、とても言えなかった。

思わず、会話を反らせてしまう。

「はい……！　あ、あの、僕、先に帰ります！　ユーミはゆっくりでいいですからっ」

ザットはなぜかモジモジとしながらそう言って、一目散に飛んでいってしまった。

「なにごと？　一緒に帰るから待っててくれたんじゃないわけ？　変なザット」

あまりにも不自然なザットの行動に首を傾げながら、踵を返すと、目の前に腕組をして仁王立ちしている黒い物体が一つ。

「サガラ！　こんなところで何をしているの？」

そこにいたのはサガラだった。

「それはこっちの台詞だ！　あんまり遅せーから、また迷子にでもなってやがるのかと思って、見に来てやったんだろーがっ」

かなり憮然とした顔でそう言い放つ。

「えーとっ。つまり、心配だから様子を見に来てくれたってこと？」

「ばっ。ち、違えーよっ。暇だったから来ただけだ！」

そうぶっきら棒に言い放ちそっぽを向く。

（サガラってもしかして心配性？）

サガラのその態度が面白くて、何だか笑いを誘われる。

「なに笑ってやがるっ」

私の様子を見て、サガラはムッとした様子でますます不機嫌そうな顔になる。

「何でもない。まだ買うものがあるの。サガラ買い物付きあってよ」

「はぁ！？　何で俺が」

「帰ったらおいしい夕飯作るから。久しぶりにいいでしょ？」

最近はザットと二人で買い物に行くことが多くて、サガラと二人でっていうのは久しぶりだ。
サガラの顔を覗き込んでお願いしてみる。
「し、仕方ねーな。サッサと行くぞ」
「へへっ。ありがと」
“おいしい夕飯”という単語に、サガラはやっと機嫌を直したらしく、市場へとスタスタと歩き出す。
「迎え来てくれてありがとね」
それに追いついて、私は言いそびれていた言葉を口にする。
「……別に」
私の言葉に不意打ちをくらったように驚いた顔をしたけれど、すぐにいつもの仏頂面で素っ気なく答え視線を外す。
その横顔が何だか赤かったのは夕日の所為だけじゃないはずだ。
そんなサガラの様子に、何だか妙にこそばゆい気持ちになる。
（最初は大嫌いな奴だったはずなのに。変なの）
わざわざ迎えに来てくれたことが、思った以上に嬉しいと感じている私がいるのだった。

（5）（後書き）

拍手設置しました。お気に召しましたら、拍手ボタンを押していただけると嬉しいです！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9408p/

空ふる～カラフル～

2011年9月25日11時57分発行